

RUSSIA

文/大平陽一

かつて名は体をあらわし、精神は形に宿った。 夜明け前のチェコとタイゲ、そしてハシェック



「ああ、サンセリフだ」。footballistaの表紙を初めて見た時、そんなつぶやきがもれた。それは、たとえばKの4つの端にあるようなひげ飾り(セリフと呼ばれる)のない、シンプルな書体。しかも大文字と小文字を区別しないシングルアルファベットだ。こうした小文字しかないサンセリフ体は、1925年頃、デザイン史上に名高いバウハウスが進められていたプロジェクト《ユニバーサル・タイプ》から生み出された。円弧と直線だけから構成される幾何学的な形態へと単純化されたフォントは、マシーンエイジにふさわしい合理的で効率的な文字として考案された。

なぜユニバーサルと呼ばれたか？ それは伝統的な書体をもつ国家的イメージ、民族色から解放された「万国共通の」文字であろうとしたから。たかだかアルファベットではあるけれど、理念としては、近代建築の祖ルースの「装飾は罪悪だ」という主張や、ル・コルビュジェの規格化の概念に通じるものがあつた。シングルアルファベットはまた、民衆的な書体であることも目指した。「普通の」書体は発音が変わるわけでもないのに大文字と小文字が区別され、しかもRとrのように形状まで異なるのだから、無意味な区別が二重になされていることになる。教育機会に恵まれぬ低所得者層に余計な苦勞を強いる、こうした不要な区別を排除するという狙いも、シングルアルファベットにはあつた。



【ユニバースとカレル・タイゲ】K、ビーブルの詩集「お茶とコーヒーを運ぶ船と一緒に」(1928年)。書名には、ユニバースを少し縦長にしたフォントが使われている。K、タイゲの構成主義的ブックデザインを代表する作例として評価が高い。

私がそんなユニバーサル・タイプについて知ったのは、秘かにその装丁本を収集しているカレル・タイゲというチェコのデザイナーの著作を通じてだった。意外なことに、チェコはブックデザイン分野では知る人ぞ知る先進国であり、とりわけ1920～30年代には優れたデザインの本が数多く出版されている。二十歳代の画家、建築家たちが手がけた本や雑誌には、今でも高い芸術性が感じられる。しかも、安価で優れたデザインの本を提供しようとの理念に立って、豪華な特装版ではなく並装版が主であった点で、两大戦間期のチェコ芸術は、特筆すべき存在だと言える。

大戦のはざまを生きた芸術家

ニュータイプグラフィといえバウハウスというのがデザイン界の常識だし、チェコのブックデザインがバウハウスから影響を受けているのは事実だが、**本家のドイツには機能主義的なデザインしかなかったのに対し、チェコでは同時にシュルレアリスムのデザインが試みられるなど、当時の前衛芸術の諸潮流を反映した多様なデザインが存在した。**他方、ロシア・アバンギャルドのリシツキイからの影響も指摘されるが、質はともかく量の面でチェコのブックデザインはロシアをはるかに凌駕している。何しろ、《オデオン出版》一社だけで1925年から31年までのわずか6年間に、若手芸術家・建築家たちの手になる優れた装丁の本を、約130冊刊行しているのだ。

実は、タイゲの本業はアバンギャルド芸術をリードした理論家としての顔であり、装本は余技に過ぎなかった。しかし、その芸術理論においても彼は、印刷物の芸術的可能性を力説し、特権階級のみが芸術を独占する状況を打破しようと訴えた。公共圏において誰もが芸術を楽しむことを、自ら率先して示そうとしたのである。ここまで読んでくださった奇特な読者諸氏なら、タイゲが共産主義こそが民主主義の究極の形だと信じていたコミニストであったと言っても、驚きはしないだろう。

市之瀬敦
×
大平陽一

ヨーロッパ余談横断

ホルトガル、ロシアを専門とする二人の教師が誌面で交流学会の異端児が、ドイツ・ボンチを細々、両サイドに思いを馳せる。欧州の西と東を結ぶ橋米に文化を絡めてサッカーを知る、月ひこコソの公開講座です。

しかし、1930年代のチェコでは政治的
前衛と芸術的前衛の分裂が深刻化していた。芸術はプロパガンダの手段として政治に従属すべきだと考える共産党系文化人たちは、同じ共産主義を支持しているにもかかわらず、前衛芸術家たちに対し、近親憎悪を思わせる批判を浴びせた。1938年というからナチスによってチェコスロバキアが解体される前年、ほとんど個人攻撃のような批判に広げて、ついにタイゲは「ドイツとロシアで同時に、国際的アバンギャルドに対する攻撃の火ぶたが切られた。ミュンヘンで退廃芸術展が開催され、モスクワではメイエルホリド劇場が文化的反動の犠牲になった」と、当時の文化情勢を描写するに至る。どの文化人よりもソ連をユートピア視していたタイゲが、ついにスターリンの文化政策をヒットラーのそれになぞらえたのである。

最終的に30年代後半にあらわになった左翼内部の分裂を和解不可能な状態にしたのは、タイゲの小冊子「流れに抗するシュルレアリスム」だった。親ソ派と目されていたタイゲだけに、その激烈な社会主義リアリズム批判は驚きをもって迎えられ、共産党系文化人からは罵々(ごうごう)たる非難の声が上がった。

「ブラハの春」と、あるフットボリスタ

戦後48年にチェコスロバキア社会主義共和国が成立すると、当局から弾圧を受けるようになったタイゲは、51年に死ぬ。共産党政権下では著書の出版はおろか、図書館での閲覧さえ禁じられた。ただ、「人間の顔をした社会主義」を標榜し、言論の自由が認められたいわゆる「ブラハの春」の一時期だけは、再版が許されている。彼の死後に出版された著書のリストを見ると、ほとんどが60年代半ばからソ連軍の侵襲してきた68年までに集中しており、感慨を禁じ得ない。今もタイゲ研究の基本文献となっている3巻本の著作集は、第2巻が69年に出版された後、打ち切られた。しかも、配本の終わっていた第2巻も、「流れに抗するシュルレアリスム」が掲載されているという理由で、当局によって回収、廃棄されてしまった。



【ある前衛】リシツキイとエレンブルクが刊行していたソ連の雑誌「オブジェ」。独仏露の3カ国語が混在している。異なる文字の混在、写真と文字の組み合わせ、グリッドデザインという点で、「アットボリスタ」の先駆け？

かつてサンフレッチェ島島やジェフ市原で活躍したイワン・ハシェックの両親は、「ブラハの春」の時期に、民主化を支持し、活動したがために、「正常化」の時代になって共産党から弾圧されたという。フットボリスタとして有望でなければ、そのお陰でスバルタ・ブラハのユースチームにスカウトされることがなければ、イワンが大学に進学することなどあり得なかったにちがいない。ベルリンの壁が崩壊した直後の89年11月、チェコでは劇作家ハベルに率いられた民主化要求が最高潮に達していた。ブラハのパーツラフ広場に集まった75万もの市民の前に、その後大統領に就任するハベルがめざとく見つけ、壇上へ呼び上げたのが、一市民として集会に参加していたハシェックだった。その時、チェコスロバキア代表キャプテンが民主革命支持の発言をしたことが、サッカーにしか関心なかった労働者たちを動かし、ピロード革命が成就したと言われる。タイゲ選集の第3巻が刊行されたのは、その5年後のことである。

【カレル・タイゲ】1900-1951 美学者、建築の理論家、美術評論家ならびに文芸評論家としても活躍。アヴァンギャルド芸術を推進し、「ドヴィエトスィル」と呼ばれた近代文化同盟に集まった若手の芸術家の先頭に立った。右はあるカリチュアリストが手書きに書いたとされるタイゲの似顔絵。



31時限目

秋の夜長とフットボール(前編)

食欲、読書、運動会。深まる秋は数多あれど、先生をお招きするからには「勉学の秋」が最優先の当連載。ところで隣は何する人ぞ？ 秋の特別編として、二回に分けてお送りします。先手の前編は大平先生。チェコの夜明けにまつわる、あるお話から。

市之瀬敦(いちのせ・あつし)

上智大学外国語学部ホルトガル語学科教授。東京外大ホルトガル語学科卒業。リスボン大学留学後は、何があってもホルトガル代表とベンフィカを愛し続けている。専攻語学は違っても大学、大学院では大平さんの後輩に当たる。雑誌上とはいえ、サッカーが縁で「再会」できて光榮です。

大平陽一(おおひら・よういち)

私が授業をサボって大学院生控え室のテレビでW杯を見ていた頃、後輩の市之瀬さんは「カムアウト」していなかった。だから「ホルトガルサッカー物語」を本屋で見つけた時は驚いた。そして読んで感心し、自分の小冊子にも似た題をつけてしまった。天理大学でロシア文化を教えます。

